

昭和晩期以降における十日戎開門神事の変遷
-新聞資料、インタビュー、参与観察を通じて-

荒川 裕紀

The Historical Evolution of the Tōka-Ebisu “Opening of the Gate” Ceremony from Late Shōwa Era

ARAKAWA, Hironori

Abstract

Every year on January 10., the main gate (known as the “red gate”) at Nishinomiya Shrine in Nishinomiya City, Hyogo Prefecture, is opened at 6 a.m for visitors to proceed to the main shrine. The event is known as the Tōka-Ebisu “Opening of the Gate” Ceremony. The first three people to arrive at the main shrine are designated *fuku-otoko* (lit. “men of fortune”). Media coverage of the event has increased from year to year, with not just local Kansai-area media but also the national television networks. Nowadays, we call this “Opening of the Gate” is not a event but “Ceremony”.

How has it changed over the years and due to what factors? The present article seeks to answer these questions through an examination of the historical record. Using such contemporary sources as newspapers and the shrine’s daily logs I will focus in particular on developments in the modern period from later years of the Shōwa period (late 1980’s) to the present. My goals are to show how this ceremony changed in Hanshin Awaji Great Earth Quake, and such a heavy social changing.

Key words: EBISU, FUKU-OTOKO, Shinto, Shrine, Nishinomiya, Shōwa, Invention of Tradition, Cultural Events

1、はじめに

これまでの論考（『北九州工業高等専門学校研究報告』43号～46号）において、兵庫県西宮神社で毎年1月10日に行われる「十日戎開門神事」の歴史の変遷、特に明治期から大正期の変遷について鉄道・電鉄といった産業化されていく側面や改暦という歴史的事象の中から新暦での十日戎が生み出され、その中で「門開け」が新聞紙上において注目されてきたことを示した。

前号の論考においては、民俗学の分野で社会構造の変容が指摘される高度経済成長期における十日戎自体の変遷について述べた。そこではモータリゼーションが、より広範囲な十日戎の参拝を可能とし、近畿圏における西宮神社における十日戎の認知度が高まったことを述べた。しかし近代の変遷の中で「西宮独自」の行事として発達してきた「門開け行事」に関しては、新聞紙上において、相対的に取り上げられることが少なくなったことを指摘した。

しかし、1970年代後半より、そのモータリゼーションの結果、漁業神としての信仰が強い近畿およびその周縁の地域（但馬・四国・和歌山）などからの参詣を可能とした。前号では、但馬地方香住の水産加工業者で1979・1980（昭和54・55）年の一番福である人物に行ったインタビューに基づいて彼らが持つ「漁業神としてのえびす信仰」が、西宮および周辺地域の住民に対して、開門行事の持つ重要さに気づかせ、再評価に繋がっていったのではないかと推論した。

平成期（1989年以降）になると十日戎開門「神事」福男「選び」の語が使われ始めることに着目した。これに関しては西宮神社の関係者とのインタビューの中で昭和天皇の

崩御が大きく関係していたことが確認できた。祝い事である十日戎自体を行うか否かについて神社内でも論議されたとのことであり、その中で「開門神事」「福男選び」の語が「創造」されたのである。

2、当論考の概要

当論考では、まずこれまでの成果を踏まえ、新しく生み出された語がいかに新聞紙上に現れてきたのかをもう一度資料から検討し、それらの語がいかに定着していったのかを考察する。

開門神事の語の創造は、まさにホブズボームの「伝統の創造（造られた伝統）」¹⁾を想起させる。当論考の具体的な概要として、その「開門神事福男選び」の語が、平成期に入り生み出され、定着していったのかについて、平成元年（1989）年以降の新聞を取り上げ、神社へのインタビューを通じて検証を行う。平成に入って以降、参加者が増加していることが新聞紙上より伺えることから、上記の「語の創造」以外にも要因があったのかについて考察を行う。特に増加に関しては、テレビを含めたマスメディアが大きいと推測するが、具体的にはどのような動きがあったのか。神社関係者、そしてマスメディアの関係者からのインタビューから考察したい。

その神社側・メディアの動きとともにその当時の参加者に焦点を当てる。これまでの論考でも十日戎開門神事の参加者へのインタビューを進めてきた。当論考においては、2名の参加者の語りを提示する。1人目の人物は二番・三番福には複数回なったものの、それでもなお毎回参加する参加者。そしてもう1人は一番福になったものの、その後は参

加しなかった参加者である。彼らを分けたものは具体的に何であったのか。聞き語りの中から考察を行う。

1997 年に当神事に一参加者としてまず参加し、その 4 月より研究を進めていくこととなった。1998 年より 7 回は参与観察という形で、福男志願者たちに混じって拝殿まで走りきるといった体験を行った。実際の体験によって何を感じたのか。神社によって創造された「神事」の語が実感を伴っているのかということを上記の参加者へのインタビューを含めて考察してみたい。

2004 年 1 月 10 日。昭和 40 年代の神社自身が福男の認定を 3 年間行わなくなった事件を髣髴とさせる、大きな出来事が起こった。昭和 10 年代から表彰されるようになった「一番福」が、この年初めて「返上される」事態に陥ったのである。この出来事に関しては、インターネットの掲示板をはじめ、全国のニュースの中でも繰り返し報道されることとなった。当論考においては、出来事の内容を詳述すると同時に、その出来事の後に西宮神社、参加者でどのようなことが話し合われ、そしてどのように変容していったかについて論じていきたい。

まさに門を揺るがす出来事後、新たな動きが神社内で起こり、そしてそれがこの論考を書く現在まで続いている。神社・参加者・氏子という関係がどのように再構築されるようになったのか、そしてその中で調査をしていた私がどのような立場となって調査、そしてそれ以外の活動を行っているのかについて記したい。

以上のことから、(1) 昭和から平成にかけての新聞紙上を中心とした資料の再検討、(2) 「開門神事」の語の定着の過程を新聞紙上・神社関係者のインタビューから追う、(3) 参与観察から得た民族誌の提示、(4) 一番福と福男を目指し続ける参加者へのインタビューと考察、(5) 福男返上、そしてその後の開門神事、(6) 研究者の調査地での調査以外での役割という 6 つの項目で論じていきたい。

6 つの項目の中で軸となってくるのは「神事とは何であるのか」である。一過性のイベントではなく、持続可能な神事として成立させているものは何か。神社関係者・マスメディア関係者の思惑や取り上げられ方を述べると同時に参加者の語りや参与観察での体験を述べることで「神事」が実感を持って語られる語であるのかを考察していきたい。

当論考で扱っている神事はまさに生きている。当論考は歴史的な考察と同時に現在の神事の報告書でもある。そして、公共人類学ないしは公共民俗学の事例としても用いることが出来る可能性を持つとも考えている。

3. 昭和から平成へ、開門「神事」の創造

前回の論考において「十日戎開門神事 福男選び」と正式に呼称されるようになったのは平成元年のことである²⁾と結論付けた。つまり自粛ムードの中で、十日戎自体の催行も検討された中で「創造」された語である。これまでは主体は参加者の側にあり、あくまで福男競争であったものが、えびす神によって「選ばれる」ものへと変化した。言葉の内実の変化としては非常に大きなものである。新聞紙上ではどのように捉えられていたのか。昭和天皇の崩御の記事ばかりが取り上げられがちであった 1989 年 (平成元年) 1 月 8 日付けの朝日新聞阪神版を紹介したい。



記事 1: 1989 年 1 月 8 日朝日新聞阪神版

「(初もうで) 西宮市社家町の西宮神社では元日に三十四万六千人、三が日で計約五十二万二千人 (同神社調べ) が初もうでに訪れ、予想の四十五万人を一六%も上回った。総務担当の西井璋 (あきら) さんは「えびす様は商売繁盛、家内安全、大漁祈願と身の回りの生活に密着した神様ですから、自粛ムードの影響を受けなかったのではないのでしょうか」という。平均株価が三万円を超える好景気に「今年もたのんます」と手を合わせる参拝客でごった返した。」

とある。三が日は崩御の前であるが、軒並み自粛ムードが漂っていた時期ではある。しかし実際には神社の予想を超える人が初詣に訪れていたという事実は興味深い。1 月 7 日の昭和天皇の崩御後、行政を中心に服喪の対応に苦慮しているのを筆頭に、コンサートの中止、阪神パーク・宝塚ファミリーランドといった遊園地も大型遊具の営業は取りやめるなど自粛ムードが漂っている。だからこそ、この西宮神社の「初もうではいつも以上の参詣客でした」というコメントは異彩を放っている。そして、次の日 1 月 9 日の朝日新聞阪神版には「商売繁盛を頼んませ きょう宵えびす」と題して以下の記事が掲載されている。

「十日は午前六時の太鼓を合図に開門する。開門時には初参りの縁起をかついで参拝者が一斉に本殿へ走り、到着順に一番福、二番福、三番福の福男三人を決める神事があり、三人には御神像や景品が授けられる。服喪期間中のため、お神楽は中止するが、ほかは例年通りで「商売繁盛ササもってこい」のにぎわいとなりそうだ」とある。軒並み自粛ムードの中「ほとんどいつもと変わらない十日戎」を選択した西宮神社の姿勢が興味深い。

朝日新聞においては福男競争を「神事」とこの時点で初めて呼称している。朝日、読売、神戸、毎日と見るとこの行事を「神事」と呼び始めたのは神戸新聞を除くと他は全てこの 1989 年以降である。神戸新聞は、1986 年 1 月 10 日夕刊では「恒例の「福男一番」」、1987 年 1 月 10 日夕刊には「本えびす参拝競争」とあり、忌籠りの「神事」の後に行われると明記されている。そして 1988 年 1 月 11 日朝刊に「今年も「福男」を選ぶ神事から」とある。忌籠神事がこの競争にまでかかる形で用いられた。1989 年 1 月 10 日の朝日新聞と神戸新聞の記事を提示する。

「平成元年一番福だ西宮神社「えびす顔」³⁾の 300 人競う本えびすの十日、西宮神社 (西宮市社家町) で恒例の開門の神事「福男選び」が行われた。福男三人による鏡開

きや参拝者への振る舞いは中止されたものの、例年通り午前六時の開門と同時に、平成元年の一番福を目指して三百人が勢いよく境内を駆け抜けた。」(神戸新聞)

「西宮市社家町の西宮神社では、午前六時に開門。約三百人の参拝客らが境内に入った。本殿までの約二百メートルを福男を決める開門神事では(中略)本殿前で福男が行う鏡開きとふるまい酒は中止された。」(朝日新聞)

朝日新聞は「選び」の語を使っておらず、新聞上での初出は平成 5 年(1 月 11 日朝刊阪神版⁴⁾)である。しかしこの 1989 年(平成元年)のどちらの記事も「神事」として、載っている所に語の創出が伺える。これは毎日新聞(1 月 11 日朝刊阪神北西版)、読売新聞(1 月 11 日朝刊阪神版)でも同じであった。この両紙に関してはたとえば読売新聞では「参詣一番乗りを競い一番福をあてる神事「福男選び」としており、前年までなかった「神事」「選び」という言葉が組み込まれている。

読売新聞(1989 年(平成元年)1 月 10 日読売新聞朝刊阪神版)では、その創出と関連して以下の記事があった。

「例年通り大祭神楽は中止 宵えびすの西宮市社家町、西宮神社では九日、天皇崩御の影響で参拝者の出足は鈍かったが、午後になって平成元年の福を求め人たちが詰めかけ、賑わいを取り戻した。神社側では「神社大祭」は神事にあたるとして例年通り開催。ただ参拝者の求めに応じて行う神楽は中止し、境内や神社周辺の露店には、派手な客の呼び込みを控えるように申し入れた。午前中は、毎年、「一番福」を求めて開門の午前六時から訪れる和歌山県白浜町の堅田漁協の一行が喪に服して参拝を中止するなど、四万平方メートルの広大な境内に人影もまばら。しかし、子供たちが始業式を終えて学校から帰宅した午後からは、親子連れが増えるなど活気づいた。宝塚市内の喫茶店主(42)は「新しい時代の商売繁盛をべっさんにお願ひしましたわ」とにっこり。」



記事 2：1989 年 1 月 10 日神戸新聞夕刊阪神版

ここから読み取れるのは、服喪を行う団体もあるが、従来と変わらず参拝に訪れる多くの人々の姿である。そして一番大切な点は「神社大祭は神事」であるために行うとし

た神社の方針ではないだろうか。先述の「えびす様は商売繁盛、家内安全、大漁祈願と身の回りの生活に密着した神様」であり、その一番の祭事である十日戎の開催は必要と考えた。「信仰・神事」を前面に押し出すことで自粛ムード一色の中でも敢えて行うことが可能となったのではないか。

だからこそ、同じように催行を決めた福男競争が「開門(の)神事」という呼称へと変化したのだといえる。先述の 1988 年の神戸新聞の記事は忌籠り神事のあとの競争までを神事として報道しているのが興味深い、この神事を拡大解釈することを翌年神社が敢えて行ったともいえる。

ちなみに今宮神社では風物詩の宝恵かごを自粛してしまい、さびしい本えびすとなってしまったことが書かれている⁵⁾。(1989 年(平成元年)1 月 10 日神戸新聞夕刊)便宜上作り出された言葉であったかも知れないが、この後新聞紙上では急速にこの語で定着をしていく。

4、「開門神事福男選び」の定着と参加者増加

「神事」「選び」の語が定着した原因は何であったのか。これまでの聞き取りなどの結果、定着させた主体としての神社の広報の姿勢が大きいと考える。

朝日新聞を例にとると、1980 年代以降は十日戎の報道のされ方として阪神版であっても「今宮戎神社が主、西宮神社が従」という書かれ方が多くなっていった。これは、阪神間が「大阪・神戸双方の郊外」という性格を持つ以上、大阪の文化が入り込みやすいこともある。十日戎自体の規模も露店数や参拝者の数ではやはり今宮戎神社に軍配が上がっていた。その中で、広報によってこの開門神事を使って多くの人に認知させていこうと取り組んだ人物が現れた。

それが、当時西宮神社権禰宜で広報担当を行うこととなった吉井良英氏であった。西宮神社で育ち、京都の神社で出仕した後、1992 年(平成 4 年)より西宮神社に戻り、広報を行うこととなった。その中で、彼が行ったのが「十日戎の行事啓蒙」であった⁶⁾。具体的には 1993 年(平成 5 年)の十日戎開門神事より(1)参加者への景品の授与(当初は 300 名のちに 1000 名対象に)(2)神事の由緒を記した啓蒙看板の設置(3)福男への景品の授与(初年度は書面では検討中となっているが、その後認定証・御神像、協賛商品(酒・米・焼き鯛))。1994 年(平成 6 年)からは(4)報道機関・出版等を通じての社会への啓蒙が加わった。1995 年からは(5)福男による協賛企業からの商品の福引(ディズニーランドペアチケット)も加わることとなった。実際景品は協賛企業から集まりだし、私が初めて参加した 1997 年(平成 9 年)には景品は大きな「福袋」となっていた⁷⁾。

この結果、人数は 1988 年の 200 名から 1999 年で 2000 名と参加者は 10 倍に増加した。走り参りに参加する以外の、福袋を目的として集まる人々の増加にも繋がり、結果として人が多く訪れ、新聞・ラジオ・テレビといった在阪のメディアもこれまで以上に報道をすることとなっていった。吉井氏は参加者が増えていったこの 12 年間で、もっとも大きな出来事は 1995 年(平成 7 年)1 月 17 日の「阪神淡路大震災」であったという。西宮神社自体も被災し、絵馬堂の全壊をはじめ、大練塀、本殿と多数の箇所被害を受けた。それは西宮神社の氏子地域が被災地区その後の復興していく地区としてとりあげられることにもつながった。そのこともあってか、次年度 1996 年 1 月 10 日の新聞(夕刊)

では、「復興」のシンボルとして一面に載せる新聞社が現れた。これまで新聞紙上では開門神事の扱いは、10 日が平日であるならば当日の夕刊の 3 面、日祝日であるならば次の日の朝刊の阪神（地方）面であった。先ほどの指摘のとおり、吉井氏による積極的な広報がある前は、その記事さえも他の十日戎（他神社 も含めた）の話題によって小さく なったり、なくなったりすることもあった。だからこそ、一面で取り上げるということはメディアにとって「震災と西宮神社」という組み合わせが生まれたことによる特例であったかもしれない。

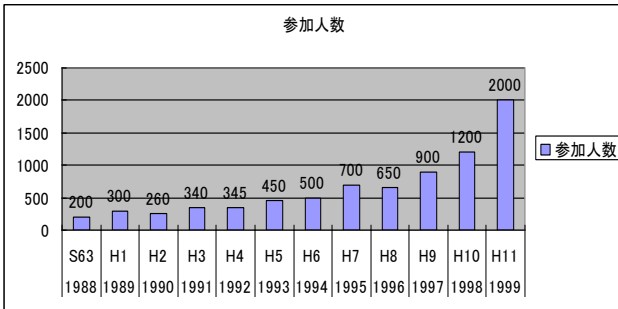


表 1：1988 年～1999 年までの年次別開門神事参加者数 (新聞資料からのデータより著者作成)



写真 1・2：神事の「啓蒙看板」(2011 年)



記事 3：1996 年(平成 8 年)1 月 10 日朝日新聞夕刊一面

記事の内容は以下に記す。

「肌を刺す寒さとなった 10 日早朝、「本えびす」を迎えた兵庫県西宮市のえべっさんの総本社、西宮神社で、一番福をめざして若者たちが境内を疾走する「走り参り」があった。江戸時代から伝わる神事。今年は「震災を乗り越えよう」という願いがこもった。午前 6 時、震災被害の修復を終え、朱を塗り直された表大門の扉が開いた。徹夜で待ち受けた約 650 人の若者らが一斉に走り出し、約 200 メートルの参道を駆け抜けた。(後略)

ここで読み取れることは、西宮神社が「総本社」であることを阪神間のみならず大阪本社版が配布される全域（近畿圏・中国・四国）に知らしめる結果となっていることである。それはこれまでの新聞資料よりも開門神事自体の説明が丁寧であり、明らかに阪神間以外の人々を対象にしている。戎信仰の強い地域としては、九州を含めた西日本である。九州では佐賀市内には江戸期からのエビス像が 300 体近くあることが知られている⁹⁾。西部本社がある九州地域にまでは広報出来ないながらも、もともと戎信仰の強い地域に「えびすの宮総本社、西宮神社」の存在を知らしめることに繋がったと考えられる。

もうひとつ、同日（1996 年 1 月 10 日）の神戸新聞の記事も取り上げる。



記事 4：1996 年（平成 8 年）1 月 10 日神戸新聞夕刊

「本えびすを迎えた西宮市社家町の西宮神社で十日早朝、恒例の「福男選び」が行われ、待ち構えていた約六百五十人の参拝者が一番福を目指して競った。見事に福をつかんだ上位三人は、全員が今年、成人式を迎える若者。しかし、震災ではそれぞれ自宅が全半壊する被害を受けており、「早く町が復興しますように」と願いをかけた」とある。福男（一番福は大阪体育大学学生、二番福は陸上部出身の会社員、三番福は明石高専 5 年生）全員の家（西宮市、芦屋市）で被害が出ている現状で、復興を願ってというメッセージが何より伝わる紙面となっている。

書かれ方としては「福をつかんだ」とはあるが、これまでの変遷で神社側の主張でもあった「福男選び」という語が、まず先に来ていること。そして震災によって復興という広範囲な対象へその概念が広がっていることである。

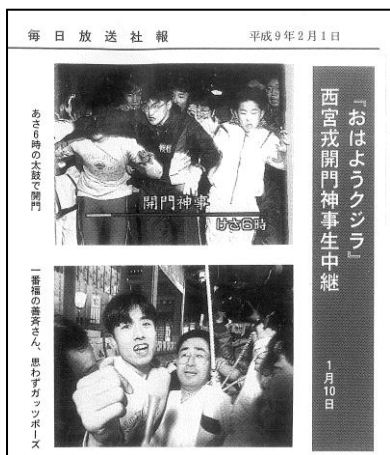
より踏み込んで言及するならば、自らの脚力を競うために参加し、福をつかみ取るところから、「復興」という概念がメディアによってさらに付与されることにより、「地域のために参加する神事」という新たな意味づけが始まる端緒

となったのではないか。

震災がもたらしたのものとしては、この 1997 年の十日戎に関して、テレビでの報道でも変化があったと吉井良英氏は話す。新聞社と同時にこれまでも在阪のテレビ局(主に ABC・MBS・関西テレビ・読売テレビ・NHK 神戸放送局¹⁰・サンテレビ・テレビ大阪)が来て取材を行い、平日ならば夕方のニュース番組の中で取り上げることも多かった。しかし、1996 年には「毎日放送 (MBS) のキー局」となる東京放送 (TBS) がこの神事を 1 月 11 日 22:00 からオンエアされた「ブロードキャスター」に取り上げられたのである。

高度経済成長期に確立された TV ネットワークによって日本全国で「十日戎開門神事福男選び」が流れることとなった。吉井氏によると 1996 年は「関西のとある神社」としか報道されなかったらしいのだが、この報道が好評だったこと¹¹もあり、次年の 1997 年は TBS が取材クルーも前日より派遣させて、独自で取材・編集して開門神事に関してドキュメントとして報道をすることとなった。

また準キー局の大阪毎日放送 (MBS) も、午前 6 時からの「史上初の」生放送として関西では放映されることにもなった。毎日放送社報の内容が詳しい。映像技術部の山田耕児氏による生中継体験記である。



記事 5: 1997 年 2 月 1 日毎日放送社報
下の写真の右側が権禰宜広報担当(当時)の吉井良英氏

「・・・その仕事は『おはようクジラ』“西宮戎 開門神事生中継”。今までニュースでの ENG 取材はあったが、生中継をするのは、鎌倉時代から始まった開門神事史上初のことで

あろう。下見をしながらカメラ台数、カメラ位置などいろいろなことを考えたが、全長 200m、20 秒あまりで終わってしまう出来事なので、あまり台数を増やしたり凝ったことをしても生かしきれないとスイッチャーの長谷川氏と相談し、4 台のカメラに絞った。西宮神社の宮司さんやディレクターとの当日までの打ち合わせも厳密さを要した。何しろ早朝の番組である。OA は 6 時ジャストからなので、それより 1 秒でも早くスタートしてもらっても 10 秒以上遅れてしまっても困る。(中略)そして当日、優秀なスタッフのおかげで準備はスムーズに進み、『朝イチパン』の中での前振り、5 時 59 分からの TBS ローカル番組から 6 時の本番へとなだれ込み、順調にこなしていく。6 時ジャスト。打ち合わせどおりに太鼓が鳴り、門が開く。一斉に飛び出す人の波。来栖アナウンサーの実況とともにあつという間にゴール。その間わずかに 27 秒。今年も去年に引き続き大阪体育大学の善齊さんが一番福に輝いた。この 2 分足らずの中継でわれわれは燃え尽きた。西宮戎初の開門神事中継は大成功に終わりました。

MBS 関係者の方々に、今年多くの福が訪れることを願います。」

の数字は関西地域のものであるが、関東地方でもこの日のブロードキャスターは高い視聴率を生み出した¹²。このことにより全国的な認知度が高まり、信仰やモノイミといった源流があつてから出来上がってきた「開門神事」という歴史的側面よりも、「スピードのある走り参り」という側面がより広範囲に伝わることとなった。同時に記事 4 から分かることとして、現在では当たり前に行われているテレビ局による生中継が 1997 年にはじめて行われたことである。着目点としては「打ち合わせも厳密を要した」「打ち合わせ通りに太鼓が鳴り、門が開く。」ところである。マスメディア、特にテレビが入り込むことでこれまで以上に時間が厳密に守られるようになった。電鉄が、閉門時間を決め、そして「次に開ける時間」を夜明けという漠然としたものから、午前 6 時に定めた大正期のような動きが、マスメディアの提起によって、放送時間の関係上より厳密化されたという点で興味深い。そしてこの生中継による競争が常態化することによって、実際に走る福男たち、とくに「走る速さ」にこれまで以上に焦点が当たることとなった。読売新聞は次の年の開門神事が行われる直前の 1997 年 12 月 27 日に「若者」との表題で森本氏と善齊氏という好敵手を取り上げ、これまでそこまで留意されていなかった「27 秒」という完走時間まで記事に書かれるようになっていく。



記事 6: 1997 年 12 月 27 日読売新聞

以上の流れから、「開門神事」「福男選び」の語については西宮神社が主体的に語句を選び、新聞、テレビといったメディアがこれまで以上に報道を行ったために、語句としては「十日戎開門神事福男選び」がこれまで認知されていた範囲以外の人たちにまで急速に広まることとなっていったと結論付ける。その過程で広まった神事ではあったが、神事の特性上「速さ」のみが取り上げられることとなり、「忌籠り」などといった詳しい内容については広まることはなく、「走りのイベント」として広まることにも繋がったと考えられる。

5、1997 年よりの参与観察

震災以降の大きな流れの渦中に、私は調査を行い始めた。特に新聞資料・社務日誌からの調査、神事関係者特に主催者である神社の関係者へのインタビュー、そして福男へのインタビューを行うこととした。祭事の概要や変遷について明らかにしても、その変遷が実体を伴って語ることが必要ではないかと考えた。そこで実際 1997 年の 1 月 10 日から行い始めたのは参与観察法による「十日戎開門神事への参加」であった。つまり、福男に混じって実際に開門神事の参加者として加わり、表大門から拝殿までを走って経験をしてみようと考えたのである。一緒に走ることによって神事の特徴を身体的に理解することが可能となる。同時にその経験の共有から参加者たちとの調査者と被調査者との関係がより深まったものとなり、質問紙法による属性調査や動機調査以上の語りをより深いところから調査することが可能となると感じたためである。

一参加者として参加した 1997 年は最前列から 10 列目あたりから、本格的にインタビューを始めた 1998 年から 2004 年までの 7 回は、門の扉を実際に手で触れ、福男たちの息吹を体全体に受けながら最前列からスタートを行った。



記事 7：産経新聞 1998 年（平成 10 年）1 月 10 日夕刊

その 8 回の経験をすべて、民族誌としてこの項目の中で提示していくのも一考ではあるが、今回は 1998 年（平成 9 年）の参与観察の内容を記して、それ以外に関しては年度ごとにどのようなことがあったかについて短くまとめた。なぜ 1998 年の参与観察記録を提示するかについては、それがはじめて最前列から参加した神事であり、だからその気づきが一番多かったためである。具体的に①どのような参加者がいて、②どのような取材があり、③どのようにスタート場所を決め、④開門まで参加者たちはどのように過ごし、そして⑤開門でどのような身体的な気づきがあったのかについて述べたい。

①参加者

本論考でも、震災以降特に走りの速さに注目されるようになったと指摘したが、実際に 16 年前にも同じような予測を立てていた。私は前日 1 月 9 日の午後 5 時頃に到着したのだが、昨年の二番福の平尾亮氏はすでに門前で到着し読書をしていた。その後午後 8 時から 9 時頃までの間に前列で走るメンバーが揃うこととなった。私を除く周り先頭集団のほとんど全てが、現役の陸上選手及び、その経験者であった。自称での最速はこの 1998 年（平成 9 年）開門神事で一番福となった吉田 光一郎氏（当時 19 歳）であった。100 メートルで 10 秒 56 が自己ベストであると話していた。そして周りのほとんどの参加者が、タイムは 100 メートルを 11 秒台で走ることができた。つまりこの福男選びは、「陸

上競技会」と化していたのである先述の平尾 亮氏（当時 21 歳）は、この開門神事を「陸上の近畿大会みたいな高レベルの争い」と話していた。

②マスコミ（特にテレビ局の取材に関して）

昨年（1997 年）は、キー局である TBS が来ており、生放送もあった。1997 年に関しては、走る前の門前で取材は、UHF 局（テレビ大阪）一局であった。そのプロデューサーの考えでは、いわばこの開門神事を「一番福レース」の形にして、ゲストに勝者を当てさせるという番組形式を考えていたらしい。これだけは誰がなるのか分からないので、一応めぼしい走者にインタビューしていた¹³⁾。

もちろんこの神事をテレビが広く知らしめる点では良いことであると思うが、速さという部分でしか一般の視聴者に伝わらないのである。

③スタート位置の決定

実際の場所決めは、参拝客の減る、午後 11 時半から 12 時頃になると言うことが近年の暗黙の了解となっていた。午後 7 時頃に去年の一番福、善齊健二氏（22 歳）が登場した。これまでの活躍から参加者に一目置かれる存在になっており、場所取りの開始を行動で示したのも彼であった。

場所取りに必要な物は、マジックと段ボールを座布団 1 枚から 2 枚程度の大きさにした物、そしてガムテープであった。善齊氏の行動に促されて、みんなが場所取りをするわけであるが、この順序は、先着順であった。このポジションに関してもやはり「常連」は、自分にとっての最良のスタート位置を知っているようで、素早く自分の場所をとっていたのが印象的であった。去年の一番福、善齊氏は門中央よりも左に去年の二番福、平尾氏はそれよりやや中央寄り、私はその隣結局一番を取ることとなった吉田氏は、中央に陣取った。

④開門まで

それから開門までの間、門は閉められることとなり、寝袋を持参する者、折りたたみの椅子に座る者色々いたが、いわば 3 時間ほど仮眠の時間となった。

私の隣にいた去年一番・二番福は、去年の開門神事のことと語り合っていた。（二番福の平尾氏は、去年三番福になった、「元一番福」の森本氏に妨害したとして、「ブロードキャスター」で報道され気が滅入っていた。そのためその報道についての批判が多かった。）話しながらも参加者は気持ちが高ぶりつつあった。午前 3 時頃よりウォーミングアップをし始め、大半が門前に戻ってきたのは午前 4 時半頃であった。

午前 5 時にもなると、参加者はかなりの人数となっていた。目測で 300 名くらいだろうか。参加者たちは走る準備をし始め、福袋目当ての近所の人たちも福引券をもらった上で並び出す。

この際に当初決めていた場所は、様々な要因で少しずつ動くこととなり、かなり混乱した。数名かはじめのポジションが完全に他人に奪われることとなり、いくらかの先頭の走者はまだアップなどをしていたため、その中に入れないと言う事態が起こってしまった。

そのなかでニュースのテレビカメラが来たため、参加者たちは色めき立ち、総立ちとなった。インタビューアが門前にまで入り込み取材を行ったため、テレビカメラに移りたい参加者によって押し合いとなった。このことによってそれまでの参加者の位置はかなり変更されてしまった。

そして、その荒れたポジショニングが最終のものとなったのである。去年の一番福善齊氏は、精神的ダメージを受けていた。

この結果、逆にいい場所に陣取ることの出来た「運の良い人々」は、口では譲らなければいけないなどと話しているが、体がもう言うことを利かないのである。つまり本音の部分では、いい場所から、一番福を狙いたいというのが、大方の気持ちであったのではないか。

私も良い場所からのスタートとなり、あくまで体験ルボながら「ひょっとして」といった様な事を考え始めていた。冷静を装ってはいたが、平常時とはまったく違う状態で午前 6 時を迎える。

⑤開門

テレビで見た映像では、「太鼓が鳴った後」に門が開いている印象があるが、1997 年に走った際、それは本殿で鳴っている映像を繋ぎ合わせたものであり、実際は鳴らないことを学習した。

そのこともあって突然の開門にはさほど驚かなかったが、開いた瞬間の私の記憶は飛んでしまっている。気付くと 30 メートルぐらいの 1 つ目のカーブに差し掛かる直線上にいた。前に 5 人ぐらい走っていた。時間としては一瞬である。

30 秒ほどして拝殿にたどり着き、三番福までが本殿に上がり、副賞をもらい、祈祷を受け、鏡割りをして、終了。後ろから参拝客が福袋を引き替える為ぞろぞろとやってきたのが印象的であった。

⑥開門神事を体験して感じたこと

一番を狙うため走ろうとする人間、テレビに映りたいがため、目立とうとする人間、「福袋」のために来る人間、信仰のために参詣する人間、あらゆる人々が、この 1 月 10 日午前 6 時に「門」を通ったわけである。自身としては 2 回目、最前列からは初めてとなるこの神事であったが、様々な人が、各自思い思いに走る、そんな祭なのであるという感じが強く残った。

「一般人参加型」とでも言おうか。そのために、各人の紐帯は、弱いものではあるが、それぞれのグループでこの神事を機会に固まりだすところなど、この神事が人々のネットワークづくりに役立っているのではないかと感じたようなこともうかがえた。そしてなにより驚いたのは、「開門」の後に「記憶」を失ったことである。それまで「忌籠り」「ミカリ」「イミ」のような用語で謹慎状態が十日戎に入る前には必須であったことを知ってはいたが、実際の祭りの盛り上がりで自分自身が冷静でなくなってしまう、つまり非日常の状態になることを経験した。これは吉井良隆氏の「厳重な忌籠りによって常人の状態と異なった神に近づく清浄な身体に身かわりをして、翌十日戎に参詣するに適した神人和合の境地」¹⁴⁾とまではいかないが、その疑似体験だと感じた。

私は、この神事の前までは 1998 年のみの一度だけ、最前列での参与観察を行おうと考えていた。しかしこの一度目の経験が強烈過ぎて、2004 年まで走り続けたと言っても過言ではない。脚力ではとても福男にはなれない。しかし門が開くことで、とてつもないエネルギーがそこには集中し、解き放たれる。その開放・解放感が快感であった。7 回その場で調査を続けるうち、参加者へのインタビューの中でこの感覚を持つ参加者が少なからず存在ことも分かった¹⁵⁾。調査をすると同時に社会的には穏やかな紐帯を保ちながら、

神人和合といった十日戎で語られてきた重要な部分を味わえる、この神事を広く世間に周知させる必要性も感じるようになった。

私が最前列で参与観察を行った 1999 年から 2004 年は参加人数が前項で述べた報道などが奏効したこともあり、参加人数が 1000 人を上回る事となる時期である。

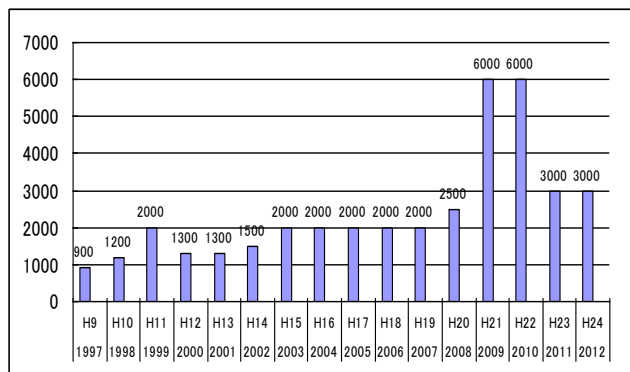


表 2：1997 年～2012 年までの参加者数の推移 (新聞資料からのデータより著者作成)

ではこれ以降、具体的にはどのようなことがあったのか。各年度の神事を簡潔に述べる。2004 年に関しては項を改めて述べるので 2003 年度までの変遷を述べたい。

1998 年度

それまで、神事の福男のための鈴紐が 3 本であったものが 1 本に統一。視覚的に見やすいことも狙っての変更。ルート自体の変更 (側面から正面へ拝殿に入るルートの変更) は 1980 年代に行われている。一番福に「新人」吉田光一郎氏。脚力のある人物。

1999 年度

二番福 2 回の平尾氏が最前列真ん中からのスタート。直前に「一番福になったら胴上げします」と私が話す。しかし拝殿直前に平尾氏が転倒¹⁶⁾。

2000 年度

平尾氏が年末の重大事故のため不参加。友人がその志を継ぎ参加。昨年度に引き続き吉田氏一番福、善齊氏二番福。一番福が東海地方出身であったため中日新聞などこれまで報道のなかった新聞社も報道。スポーツ新聞も 1999 年度よりスポーツ報知が報道開始、他社も記事を出すようになる。



記事 8：中日新聞 2000 年 (平成 8 年) 1 月 11 日

2001 年度

善齊氏一番福に返り咲き。高校生が多数参加しており、二番福に立命館宇治高校の陸上部嶋屋氏、三番福に県立西宮高校のサッカー部中村氏。陸上部以外にも「開門神事」自体を目的として活動する福男サークルが神戸大学を中心に誕生し、福袋以外にも開門神事自体に参加する人々が増えてきたとも感じた。

2002 年度

報道が激化。順番をお互いで決めているのに、直前に飛び込んで前に陣取る若者が数名。門の前での統制が取れなくなり、開門直前まで怒号が飛び交う。終わった後、神戸大学の福男サークル、昨年度からギブスをつけながらも大事故から生還し行事に参加を始めた平尾氏らと、門の前の規律の保持について話をするようになる。表大門に来た順番で場所取りが出来る暗黙のルールがあったために、参加者によってはテントを持ち込んで泊り込む者も散見されるようになった。

2003 年度

更なる開門前の場所争いが激化。3日位前よりテントにて泊り込む団体が増えた。そしてその中で、一番初めに来た団体が開門時の混乱をなくすため、リーダーシップをとって場所決めを行う。結果としてそのグループから三番福が生まれたが、何日も門前で泊まるため火の使用などで問題が起きるようになってきた。昨年度より参加者の有志が「福男向上委員会」という名称で組織を作ればいかかとの話を主催者の西宮神社と行った。

以上のように、報道が過熱し、好奇心からの参加者は増加した。しかし、もともと決まりごとがなく、場所決めなどが暗黙の了解によって動いていたことが明確となった。同時に門を開ける人はいるが、直前の混乱を收拾する人はなく、あくまで参加者の良識に任されていることが経年調査を行うことで明らかになった。

6. 福男と「えびすに好かれた男」

この神事の調査を私が行うようになってから、開門神事に参加する多くの参加者はもとより、過去の一番福の人たち、神社の関係者、神事を報道するマスコミの関係者などと話やインタビューをする機会に恵まれた。ここでは2人の人物に限ってインタビューの内容を提示してみたい。ここでの2人はどちらも三番福までに入ったことのある広義での「福男」である。一人は1997年1998年の二番福を獲得した平尾亮氏、もう一人は1999年に一番福を手にした相馬聡氏である。彼ら二人の神事に関わるスタンスは明らかに違う。それはなぜなのか。簡単なインタビューではあるが、その内容を基に考えてみたい。インタビューは2004年に行っており、適宜修正している。

(1) 平尾 亮氏 (2013年現在、37歳)

写真 3 : 平尾亮氏 (2013年1月右から2人目) 「西宮神社開門神事講社」メンバーとともに



プロフィール：尼崎市出身。大学2年次の時、初参加で二番福を取る。そして次の年も二番福に輝き1999年に門前に一番早く陣取り、門の開く中央から出走し独走態勢に入るも拝殿の上り坂で転倒し一番福はとれずに終わった。その年の12月には名神高速道路で事故に遭い片足を切断するかという大きな怪我を負う。その事故で2000年は不参加に終わったが2001年には入院中ながらギブスを付けて神事に参加。その後も走力は落ちたが毎年神事には参加し、インタビューを行った2004年には開門神事の持つ問題に立ち向かおうと「福男向上委員会」なるサークルを発足させ神社などへの提言を行っていた。それと共に神事をよりよく多くの人に知ってもらおうとホームページを立ち上げ2013年現在でもその啓発に努めている。

彼と初めて知り合った、言葉を交わしたのは1998年1月9日であった。初めてお会いしたときの印象が一番はじめに拝殿に乗り込むことのみを思い詰めて来ている感じの漂う参加者の一人であった。こちらが話しかけても必要以上のことは話さない、そういった印象が強かった。その後彼自身にこのことを聞くとやはり事故の後と前で開門神事に関わる考え方が変わったと話された。1999年までは開門神事とはただ一番を取るために走っていたに過ぎなかった、その頃は実際後列で走る人の気持ちはよく分からなかったとのことである。しかし約2年が過ぎ、ギブスを付けて走るようになってみるとひとつのことに気が付いた。それは「門が開くときの高揚感は最前列にいても味わえるのだ」ということであった。そのことでまた違った意味で開門神事に参加し続けようとの思いを強めた。そのことが現在のホームページを通じた人たちとともに自主的な神事の広報活動や、「福男向上委員会」の立ち上げなどの力となっているとのことである。彼自身「開門神事とはアイデンティティーの一部である。そこ（西宮神社）に門がある限り参加する」といったような表現をする¹⁷⁾。開門神事を愛してやまない一人であるということは、彼と話しているとひしひしと伝わってくるのである。

(2) 相馬 聡氏 (インタビュー当時25歳)

プロフィール：栃木県出身。大阪体育大学の陸上部時代そして現在でも短距離の選手。現在は大阪府内の教育職に就いており、来年度以降は実家のある栃木県に帰る予定とのこと。開門神事には1999年に1回参加したのみでそれから先は参加せず、2004年に「久しぶりに」やってきて開門神事に参加した。

彼は、インタビューをした当時でも現役の陸上競技の選手であり1999年に一番福になった当時も門から拝殿までの距離に近い200mのランナーであった。

普通近年なら一番福を取った次の年も現れる人が多いのだが、彼は来なかった。その訳を彼に尋ねるとテレビ局および番組制作会社の「速さのみ競わせること」を対象にした番組編成、陸上競技に対する無知（ウォーミングアップしていないのに厳寒の境内を突っ走れといったような注文）にうんざりしたとのこと。実際次年は参加しようとも考えたが、マスコミなどからの電話が殺到して興味本位のみでの報道、そして報道前の約束を守らないことに嫌気がさしたのだと話された。それと共に学内（大阪体育大学）など周りからの声もねたみが多く（例えば「開門神事で一番になっていい気になるな！実際の競技会でいい成績あげ

てみる！」などの陰口があったとのことである。) 参加をしなかったとのことである。

なぜ今回は参加したのか。その訳は実家のある栃木県に帰ることとなるが、その前に自分が走っている姿、神事での真剣な姿を指導している生徒に見せたかったのだと話された。良くも悪くもこの神事が相馬氏の参加する最後の神事にするととのこと、そのために「恥ずかしくない走りが出来たらいい」とも話されていた。

この文章を書いている 2013 年現在、相馬氏は関東の私立の学園で陸上部のコーチを務めている。そして平尾氏は新聞社に勤務しながら、十日戎開門神事を司る「十日戎開門神事講社」講長として大きな役割を担っている。1999 年にどちらも走り、福を求めて走った。1 人は走りに関する仕事に就き、もう 1 人は「戎さまに好かれて」彼しか出来ない奉仕を行っている。

7、2004 年 1 月 10 日以後

2004 年 1 月 10 日の開門神事は、それまで続いた門前での統率者がいない状態について再考する機会であった。前に 2003 年の項で述べたが、昨年三番福をとったグループが、今年は開門の一週間位前より門前で野営し、大人数で参加した。開門直前までは彼らの統率の下、整然と順番決め・場所取りが行われた。しかし、開門して昨年度の三番福の走者以外は、他の参加者をマークする部隊として機能させた。実際、昨年の三番福は見事、一番となったが、このやり方が全国ネットのテレビで放映され、「アシストをしたのではないか」との記事が 1 月 11 日に読売新聞 (社会面) から出て、そのニュースがインターネットニュース (Yahoo! など) にまで掲載。ちょうど成人式も重なったこともあり、掲示板で盛り上がりを見せ、そのやり方に対して非難が集中した。普段は報道しない、在京キー局のワイドショー番組まで取り上げられることとなった。



記事 9：大阪スポーツ 2004 年 1 月 13 日

結果としては、この年の一番福は「返上」されることとなった。同時に西宮神社と参加者に残されたことは、この後どのような組織を作るかということであった。そこでその前から自然発生的に立ち上がってきた「福男向上委員会」が、神社の意向を受けた組織として「開門神事保存会」に発展。これまで参加していたメンバーが集まって、どのような方策を採るのかが話し合われた。そして、現地氏子の組織に入るのがいいとのこと、氏子青年会である「若戎会」の中で活動を行うこととなった。そして具体的な変更点として門に並ぶのを当日の 0 時まで集まった参加者でくじ引きにする方式¹⁸⁾にした。2005 年から 2008 年までの 4 年を年度ごとの修正点を入れながら、この方式を行った。

2005 年から 2008 年までの 4 年間、年度ごとに修正を行いながら、この方式を行った。そして 2009 年 1 月にこの組織が正式に西宮神社の公認の講社組織となり現在に至っている。

参加者が、新たな伝統を作る側に入るといふ形となり、さまざまな軋轢もあった。現在活動を始めて 5 年経ったが、次回の報告でどのような影響を与えているのかについて述べていきたい。



記事 10：朝日新聞 2009 年 1 月 5 日

8、考察・これからの展望

当論考は、昭和晩期、それも最終年である昭和 63 年・64 年 (1988 年・1989 年) から平成 20 年代という時期の変遷を追った。これまでの手法であった、新聞資料・社務日誌などの神社に残されている資料・史料を調査し、当事者へのインタビューを行った。そしてそれだけでなく、1998 年 (平成 10 年) からは参与観察という手法を使つての調査を行った。そのことで神社側やマスメディアから付される視点とともに参加者の視点からもこの神事が捉えることができると考えたためである。

当論考における歴史の変遷では、昭和 50 年代より新たな価値の付与が行われた門開け行事・福男競争が、昭和平成の境目に「開門神事・福男選び」と神社側が語の合成を行い、新たな意味を「創造した」ことが大きい。そして神社側の集客、広報的努力もあってマスメディアにも積極的に取り上げられることにつながり、開門神事の規模が大きくなったことが新聞資料・神社関係者・マスメディア関係者へのインタビューから明らかにした。

同時に、動機はどうであれ、集まってきた参加者へのインタビュー、神事を体験する参与観察によって、この神事が「ただ一番乗りを競う」だけのものではなく、従来の祭りの持つ非日常性を感じることでできるものなのということがインタビューそして参与観察から導き出された。だからこそ、一時的に人数が増加しただけでなく、持続可能な神事としてこれからも成立し続けるのではないかと考える。

「祭りの持つ非日常性」に関しては、更なる検討が必要であろう。参加者への質問紙の記述の解析、また民俗学や人類学で語られる祭礼での諸事例での「祭りの持つ非日常性」との比較をすることが必要である。次回への課題としたい。そして、参与観察によって明らかになったことは、

新しく作られた神事だったこともあり、参加自由度が高いということである。そのこともあり、容易に神事における非日常感を味わえるものとして近畿圏で認知され、キー局を含むマスメディアによって、これまで以上の参加者が来ることとなった。今回の課題として、参加者の属性分析を行い、考察をさらに深めていきたい。

また、参与観察として当神事をフィールドとすることによって諸問題が鮮明となった。2004 年の開門神事が顕著であるが、近代、明治期大正期に新しく成立したとしても、地域社会の中で長らく行われてきた神事が、急激な報道によってこれまでの規範が通用しない状態に陥ったことである。何とか安全に神事の催行をしたい神社側、そして神事にアイデンティティーを見出す参加者側が、話し合いを持つことで新たな解決策を探り出したことは興味深い。参与観察をしていた私もこの問題解決の中で活動することとなったが、これは公共民俗学・公共人類学の範囲であると認識する。公共民俗学・公共人類学における一実践になっていけるのか¹⁹⁾を次回以降の論考の課題としていきたい。

(注)

1) エリック・ホブズボーム著・前川啓治・梶原景昭訳『創られた伝統』1992、紀伊國屋書店荒川裕紀「十日戎開門「神事」の創造—「門開け」から「神事」へ—高度経済成長以降の日本文化のあり方に関する一考察—『北九州工業高等専門学校研究報告』第 46 号 2013/1

2) 荒川裕紀「十日戎開門「神事」の創造—「門開け」から「神事」へ—高度経済成長以降の日本文化のあり方に関する一考察—『北九州工業高等専門学校研究報告』第 46 号 2013/1

3) 実はこの前年には「だれが見てもふくぶくしいえびす顔」として選ばれた「ミスターえびす」を登場させ、絵馬殿で福ザサ(1本千円)の授与を行っていたことが新聞紙上から散見される。大阪今宮戎神社の公募で選ばれる「福娘」と同じような「顔」にして、十日戎を盛り上げていこうという考えが西宮神社にもあった。

4) 神戸新聞の阪神版には開門神事の記載は比較的現れるが、朝日新聞の場合は阪神版であっても西宮神社と大阪の今宮戎神社を一緒に載せる、ないしは今宮戎神社の十日戎の風物詩でもある「宝恵かご」や「福娘」を取り上げることが多かった。文章の順序としても1番に「今宮」、2番に「西宮」と取り上げていることが分かる。1990年(平成2年)、1991年(平成3年)と「福男」のことは取り上げられているが、1992年(平成4年)は取り上げられていない。朝日新聞の阪神版で紙面上の取り上げられ方の逆転を始めるのは平成5年以降のことである。これも西宮神社の広報活動が大きかったと考えられる。

5) 1989年(平成元年)1月8日の読売新聞では、大阪の今宮戎神社では7日に緊急会議が開かれて「7日のモチまきの中止」「宝恵かごの取り止め」「商売繁盛ササもってこいの(おはやし)の取り止め」が決議された。堀川、八尾、服部大神宮など十日戎を行う各神社によって方針は様々であったことが伺える。しかしその中で西宮は「門開け」をし「福男選び」は行うとした。伝統の創造を考えると、ここがひとつの分岐点であったと考える。

6) 社務回議用紙を見ていると件名に「啓蒙」の語を使い始めたのは1995年(平成7年)の十日戎の時である。しかし彼が始めて担当した1993年(平成5年)から啓蒙看板の設置を行い出しており、観光文化資源として早くから気付いていることが伺える。

7) 社務回議用紙を見ていると、参加者の景品の協賛の会社も神社側の経営努力もあってか、年を追うごとに増えている。西宮を代表する酒造会社、福男への景品も含めて協賛としては大きい。

8) 購読者もあるだろうが、神戸新聞の場合、他神社では神戸の柳原神社が挙げられる。朝日では、今宮戎神社・堀川神社・服部天満宮であろうか。「阪神版」の新聞の中の阪神(地方)面であってもその傾向があった。

9) 成城大院文学大学学究科日本常民文化専攻田中宣一研究室編『えびすのせかい 全国エビス信仰調査報告書』2003、成城大学 pp. 220-221

10) NHKに関してはこの後の「メディア合戦」になった後もあまり来ていなかった。それは関係者からの聞き書きとなるが、理由として1985年(昭和60年)に参加者が門の扉を押し過ぎてしまい、5分前にも関わらず拝殿に参加者がたどり着いてしまうという「ハプニング」があったことが大きかったとされている。

11) 当時のTBSのディレクター(現「夢の扉」のプロデューサー)菅

谷敬氏は「関西の祭りは当時関東圏では知られていなかった。97年の年始の番組に関する企画を立てる際に雑誌か何かで、偶然にこの神事のことを知った。成人式より前で普段ならばカメラも余っている時期であり、その余裕からクルーを組んだ。」と話す。1年前の報道に関しては本人としてはあまり印象がないとのことである。1996年の年末に一度関西に来て、大阪体育大学まで善齊氏の取材を行ったとのことである。神事当日は地方で「ここまで若者が集まって走っている」ことに衝撃を受けたと話す。結果的に報道は成功を取めたが、現在におけるここまでの隆盛は予期できなかったと話す。

12) これは開門神事があったから高視聴率になったのではなく、当時芸能人の問題で世間が注目していたこともあって高視聴率であったと吉井良英氏は話す。しかし、その高い視聴率のおかげで、開門神事がその用語(そして「えびす宮の総本社が西宮神社である」というメッセージ)とともに全国に普及することとなった。

13) 放映された番組はテレビ大阪の番組であったために、今宮戎神社の十日戎が主となったものであった。その中で「西宮」について流されていた。これまでの福男になった人物を候補として、タレントに誰が一番になるかを当てさせた。結局はこれまで一番福になっていなかった吉田氏になったために番組内では「ミスターX」の勝利であるとされた。

14) 吉井良隆『神社史論攻』1990、西宮神社 pp.61

15) 参加者自体の属性、参加する動機などに関しては聞き取り調査以外にも2001年から現在に至るまで質問紙による調査を行っている。その属性の分析、動機、参加した完走などの分析は次回の記事にて報告したい。ただその中で聞いていると「目の前が真っ白になった」「白銀の世界の中をスローモーションで走っているようだった」など「非日常の語り」が多数表れてくる。そしてその非日常を感じた層が、毎年参加する「開門神事リピーター」となって存在している。調査を本格的に開始した1998年から2004年までは現在のようにくじ引きで位置を決めるものではなかったために、門の前に自然発生的にグループが出来ていた。本文で「門の前での繋がり」と書いているが、当時のつながりが現在の「十日戎開門神事講社」に発展しており、その機会がとりづらいう現在、このつながりの醸成をどのように行っていくのかを講社として考えなければならぬと感じている。

16) この模様に関しては、これまでの二番番をとり続けたと言うこと、最前列、真ん中で走ったこともあり、特別にテレビ番組の中で取り上げられた。それは同年2月に2週にわたって放映されたフジテレビ「奇跡体験!アンビリバーボー」であった。この年の開門神事を取り上げるとともに次項でインタビューしている当時の一番番を「福男」、平尾氏を「不幸男」として実際に、もう一度参道で走って対戦させるものであった。結果は、平尾氏が再度転倒してしまった。この報道に関しては、神事を面白おかしく取り上げたとして批判する向きも多かったが、ブロードキャスター同様に全国への認知度が高まったことは間違いない。実際、この映像を見て、参加の要因となったという遠方からの参加者にも実際にお目にかかったことがある。

17) 彼が1997年、初出場したとき着ていたのが「がんばろう KOBE」と書かれたトレーナーであり、講長となった現在も当日はこのトレーナーに講社の法被を着て当日は動き回る。震災と十日戎開門神事がつながっていることが伺える。

18) このやり方は、参加者側からも西宮神社からも反対意見があった。すべての人に平等に福を持ち帰って欲しいというのが神社側の見解であり、(熱心な)参加者も自らのスタート位置の順位をくじ引きにするには耐えられなかったからである。しかし、兵庫県内では大人数での将棋倒しになり死者が出た事故もあり、兵庫県警側からも正式に予防策として取り組んで欲しいという要望があった。結果としてはこのやり方が現在でも踏襲されている。

19) 伊藤亜人『文化人類学で読む日本の民俗社会』2007、有斐閣 pp.157-182 伊藤氏は「市民よさこい祭り」の中で新しい祭りが持つ「流動的かつ柔軟な態勢」「主催者側の中心性・指導性を欠如した祭りが、結果的に参加者の主体性を生み出したこと」「伝統的な都市祭礼では参加できなかった周縁的セクターが参加し主役化したこと」で、新たな公共圏と呼ぶにふさわしい現代的な儀礼空間を生み出したことを明らかにした。伊藤氏の研究対象のよさこい祭りと当神事は祭事自体の形式は異なるが、参加者主体という近似性がある。調査者が人類学的知見を持って積極的に祭事に関わることは、地域活性化に直接的に作用をもたらす意味で、公共人類学の範疇で新たな地平を切り開く。調査地域の人々の生活に密接に関わり合うことで現地に溶け込んで人々と一緒に「祭り」を作り上げ、「社会の機能体」として作用させることで地域の発展に早い段階から直接寄与していく手法は、公共民俗学・公共人類学という新たな境地に寄与することとなる。

(2013年11月11日 受理)